

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

ISSN 0389-1984

163 東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
 新宿三井ビル37F
 Phone: 03-344-1701~3
 Fax: 03-342-6911

April 1990

No.52

- 2 “身近な環境”のために“身近な基金”を
- 3 新展開の市民活動助成
- 4 FNS大阪国際ワークショップを開催して
- 5 砂漠化した草原に緑の牧農社会の再来を!
- 6 東南アジア本に市民性を
- 7 新刊紹介、他
- 8 最近の報告書から、他

第54回理事会開催

1990年度の事業計画を決定

トヨタ財団では第54回の理事会を去る3月6日、都内にて開催し、1989年度市民活動助成および第4回研究コンクール・フォローアップ助成などの助成対象を決定するとともに、90年度の事業計画も決定した。

これにより、昨年度の助成実績は5億252万円、本年度の助成予定額は4億8,000万円となった。〔7頁・内訳参照〕

■研究助成の公募は5月末日まで

4月1日より公募を開始している本助成については、昨年度と同様、『新しい人間社会の探求』を基本テーマに、重点課題として①「高度技術社会への対応」、②「多文化社会への対応」を設けている。また、研究種別についても、個人奨励（第I種）研究、試行・準備（第II種）研究、総合（第III種）研究となっている。

■市民活動助成は大幅改定し、公募も6月20日まで

本年度より、活動全体のレベル・アップに貢献することを目的に、『新しい人間社会をめざした市民活動に関するプロジェクト』をテーマとし、活動の交流や促進に寄与する種々のプロジェクトを広く公募し助成を行うこととなった。

昨年度までは「活動記録の作成」のみに公募を限定していたが、今回からはこれを含み、先の狙いに該当するさまざまなプロジェクトをもその対象とすることになったわけである。

なお、公募は年2回で、第1期は6月20日まで。〔3頁参照〕

■研究コンクールは第5回を継続実施

一昨年11月より2ヶ年にわたる研究を実施してきた第5回の本研究助成対象6件については、この11月に最終報告会を実施し、これらを受け来年3月には最優秀賞1件、優秀賞数件を決定する予定。なお、第6回以降については、その実施は現在検討中のため、未定となっている。

■成果発表助成への応募は年中受付

当財団の助成による成果の印刷や出版、およびシンポジウムの開催などに関する成果発表への助成は年中受け付けている。

■計画助成は非公募

昨年度から開始したこの助成は、“財団独自の調査と企画による弾力性ある助成”の展開を目的としており、財団事務局と関係者との合議にもとづき計画を練り上げていくため、非公募としている。

第27回研究報告を開催予定……………

「アラスカ発 いのちへの問いかけ—変わりゆくカブーとエスキモーの生活—」をテーマとした研究報告会を来る5月15日（火）日本青年館・国際ホールにて開催予定〔8頁参照〕

第4回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”

フォローアップ助成対象に「行徳野鳥観察舎友の会」を決定!

この助成については、昨年決定した最優秀賞1件および優秀賞3件のうち、3つのグループより申請があり、選考委員会での審査を経て、今回標記のグループが助成の対象となった。なお、同会には基金として2,000万円が支払われる。〔2頁参照〕

“身近な環境”のために“身近な基金”を

山岡義典 研究助成部門

■継続的なフォローアップのために

去る3月16日の午前、山階鳥類研究所と行徳野鳥観察舎友の会およびトヨタ財団の関係者が財団の会議室に集まり、今後の方針を打ち合わせた。第4回研究コンクールのフォローアップ助成の実施に関する確認である。

“身近な環境をみつめよう”をテーマに研究コンクールを開始したのは今から10年余り前、1979年の秋のことである。以後1年おきに実施してきた。第4回^{*}がスタートしたのは1985年秋。

全国から140の研究計画が提出され、これらの中から20のチームが選ばれて半年間の予備研究を実施、さらにその中から8チームが選ばれて2年間の本研究に挑戦した。そして昨年3月、1件の最優秀賞と3件の優秀賞が選出され、それらの中の1チームがその後の長期的な活動のためのフォローアップ助成を受けることになったのである。助成の内容は、数年で使い切りの研究費でもよいし、もっと長期に使用する基金としてもよい。助成金額は前者で1,000万円以内、後者の場合は2,000万円以内。

3つのチームからフォローアップ助成の申請を受理したのは昨年の6月末。選考委員会で議論を重ねた末、最優秀賞受賞の「行徳野鳥観察舎友の会」を助成対象とするところまでは決まったが、申請どおりに基金の設定が可能なのかどうか、さらに検討することになった。そしてその結果、財団法人山階鳥類研究所に2,000万円を基金を設け、その助成によって「友の会」が長期的な活動を継続するという方針が固まった。選考委員会の了承を得て理事会で助成を決定したのが3月6日。冒頭の確認はこの決定に基づくものであった。

■“夢追い人”としての「友の会」

「新浜」と呼ばれる千葉県市川市行徳の野鳥保護区は、野鳥は飛来するものの、適当な淡水がないために繁殖はしない。しかも次第に乾燥化が進み、野鳥にとっての環境は悪くなる一方である。「友の会」では保護区の周囲を流れるドブ川に着目した。都市下水の流入する、ほとんど生命の存在しない死んだ川である。うなぎ養殖用の水車3台をこの川に設置、汚れた水をかくはんすることによって水質が改善され微生物が生息するようになったことを確認し、その水を「新浜」に掘った人工池に導入する。するとまたたくまに昆虫などの動物相が豊富になり、飛来する野鳥も巣をつくるようになり、やがて雛が孵り、そこか

ら巣立っていったのである。報告書はその過程をできるだけ定量的に克明に記録^{**}している。

この水車の運転を継続し、保護区の生態系の変化を観察し続け、同時に市や県とともに協力しながらより好ましい湿原の回復を目指す。これが今後の「友の会」の活動予定である。これまでどおり順調な回復が進むのか、思いがけない現象によって頓挫することになるのか、新しい着想によって別の可能性が生まれてくるのか、それは誰も知らない。保護区の保存に係わった野鳥マニアたちが、家族ぐるみで夢を追求し続けるのみである。

■求められる「基金」づくりのための環境整備

このような市民の夢、斬新な発想とたくましい継続力をもった市民の活動が、現在日本の各地で大きく育ちつつあるように思う。そのような身近な活動を支えるための資金源をどう考えるか。この数年私たちが考えてきた一つの大きなテーマであった。イベントのためなら何とかかなる。必要なのは、結果の見えにくい地道な継続的な活動のための資金である。

その回答の一つが、「身近な基金」の重要性である。できることなら「自前の基金」であってほしい。市民の手で運営される市民のための独立した基金である。このような基金のモデルになるようなものはできないか。そのような考えから、第4回のコンクールではフォローアップ助成で基金助成の途を開くことにした。しかし実際には大変難しい。公益法人の制度は、もともと市民の自主活動の母体としては不向きである。公益信託もあるが、一つの団体の資金源としては使いにくい。これらをすぐに適用するには困難が多い。

その結果として誕生したのが、目的を同じくする財団法人と協力し、そこに基金を設ける方法である。いろいろと問題も出てくるかもしれない。しかしグラスルーツの市民の活動を支える仕組みが存在しない現在、ひとつの手法と言えよう。

私たちは早くこの基金が独立した自前の基金になることを望みつつ、この助成を決定した。同時に、このような活動を支える非営利法人制度の確立やそれを促進するような税制の工夫についても努力すべきことを痛感したのである。

* 公募開始以後の全過程をまとめた『第4回研究コンクール報告書』が3月末に発行された(A4変形判・64頁)。

ご希望の方は郵送料として210円分の切手を同封の上、研究コンクール係へ。

** 『せせらぎ1号発車オーライ……』(B6判 218頁)、行徳野鳥観察舎友の会・編、頒布価格1,000円)

新展開の市民活動助成

—活動全体のレベルアップを目指して

渡辺 元 市民活動助成・担当

市民活動助成については、今回（1990年度）もこの4月から公募を開始している。すでに、広告や応募要項にて助成方針とそれに伴う助成内容の大きな変更をご存知の向きも多いかと思うが、ここに改めてその経緯と内容等につき紹介することにしたい。

●これまでの助成活動

1984年度に『研究助成・特定課題』として「市民活動の記録の作成」に対して助成を開始したのがこの助成の始まりである。これは、民間助成財団としての当財団のなすべき活動の一つとして、各地でさまざまに展開されている市民による“草の根”の活動を側面から支援する一つの方法として試行的に実施されたものであった。その目的は、“活動の体験を共有の財産に！”と謳った助成の主旨とおり、個々の活動の体験を他の活動団体などと共に分ち合うために、その体験を記録し出版することにある。

84・85年度と2度の実施を経た後、86年度からは「研究助成」の枠組みを離れ、『活動記録助成』として引続き同様の助成を行うと同時に、すでに完成された記録の出版に対する助成も開始した。

さらに、88年度からは『市民活動助成』として上記の助成と並行し、“記録”以外のプロジェクトに対する助成も計画的に行い始めた。これは、活動の交流や活動全体の促進に役立ち得るプロジェクト（「活動交流促進プロジェクト」と呼ぶ）を対象に、事務局と助成希望者との会議にもとづき計画を練り上げていく非公募型の助成である。

こうして89（昨）年度までに、「記録の作成」52件、同「出版」25件（これにより刊行された本については右記参照）、「活動交流促進プロジェクト」11件、合計88件が助成の対象となった。

●1990（今）年度からの助成について

以上のような経緯と経験を踏まえ、冒頭で述べたとおり、今年度から助成方針およびその内容の変更に至ったわけである。要約すれば、先の「記録の作成と出版」および「活動交流促進プロジェクト」を合わせた助成ということができるが、これにより、“市民活動全体のレベル・アップに貢献すること”をその主旨としている。さらに言えば、活動全体の強化・促進を支える市民活動の分野における“ネットワーク”のエンカレッジをその狙いとしている。

行政体や企業体を中心に構成され、ある種の手詰まり感に陥っている現在社会の中にあり、“草の根”からの視点でさまざまな問題に対処していこうとしている市民の活動と、こうした動きの中に漂う希望や理想からは、将来へ向けての市民による「もうひとつの社会像」が浮き彫りになる可能性が感じられるからである。

独自の発想や考えにもとづき、新しい人間社会の“芽”となるような創造的で先見性に富む、開かれた活動を元気にやっている全国各地の団体からの熱心な応募を期待したい。

* * *

なお、公募期間は、第1期が4月1日から6月20日まで、第2期が10月1日から11月30日まで、申請用紙は「出版」用と「プロジェクト」用の2種類あり、入手希望の際には「計画の概要」を提出いただく必要があるなど、申請のための詳細については、先ず「応募要項」を入手のうえ参照・検討いただきたい。

●今号を含め、これまでの財団レポートでも紹介してきたように、現在以下のとおり13冊が助成により刊行されている。

▽ ▽ ▽

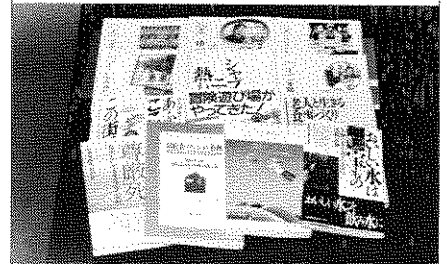
羽根木プレーパークの会—『冒険遊び場がやってきた!』（晶文社・刊、1,600円）、北九州キャップハンディ実行委員会—『ハンディキャップオリエンテーリング』（松籟社・刊、1,800円）、大野の水を考える会—『おいしい水は宝物』（築地書館・刊、1,500円）、福島智君とともに歩む会—『ゆびで聴く』

（松籟社・刊、1,800円）、明るい老後を考える会—『あふれるところをこの街で』（雲母書房・刊、1,800円）、やどかりの里—『心のネットワークづくり』

（松籟社・刊、1,800円）、関西分譲共同住宅管理組合協議会—『居住者のマンション管理』（都市文化社・刊、1,900円）、老人給食協力会・ふきのとう—『老人と生きる食事づくり』（晶文社・刊、1,580円）、日本青年奉仕協会—『一年間ボランティア計画』（松籟社・刊、1,800円）、シャプラニール=市民による海外協力の会—『シャプラニールの熱い風』（めこん・刊、2,400円）、寝屋川市民たすけあいの会—『たすけあいのネットワーク』（松籟社・刊、1,800円）、日本尊厳死協会—『尊厳死』

（講談社・刊、1,700円）、奈良たんぼぼの会—『花になれ 風になれ』（たんぼぼの家・刊、1,500円）

（松籟社・刊、1,800円）、日本尊厳死協会—『尊厳死』（講談社・刊、1,700円）、奈良たんぼぼの会—『花になれ 風になれ』（たんぼぼの家・刊、1,500円）



FNS大阪国際ワークショップを開催して

川村次郎 (大阪労災病院リハビリテーション診療科) FNS大阪国際ワークショップ・組織委員長

■FNSの第一線研究者が大阪に集合

FNSとは、麻痺した手足の機能を電気刺激によって回復させる技術であり、Functional Neuromuscular Stimulation (機能的神経筋電気刺激)の略称である。われわれ大阪とユーゴスラビア、アメリカの国際共同研究グループは、1984年度から3年間にわたるトヨタ財団の研究助成を受けFNSの実用化研究を行った。

共同研究の成果発表と今後の展開の方向性を探ることを目的に、昨年11月19日から21日の3日間、大阪国際交流センターにおいて国際ワークショップを開催したので、その模様を報告したい。

中身の濃い実質的な討論を行うため、共同研究者に加えて生理学者を含む海外のトップレベルのFNS研究者と、若手を中心とする国内の研究者にも参加をお願いしたところ、海外から14人、国内から35人の参加が得られ、名実ともに国際ワークショップとすることができた。

なお開催に当たっては、1989年度トヨタ財団成果発表助成のほか、井上科学振興財団からも助成を受けた。運営にはFNS大阪国際ワークショップ組織委員会(委員は玉置哲也・和医大、赤沢堅造・阪大・工、西沢一嘉・大阪電通大、末田純・鳴門教大、牧川方昭・国立循環器病センター、筆者の計6人)が当たった。

■基礎から最新の成果までを発表

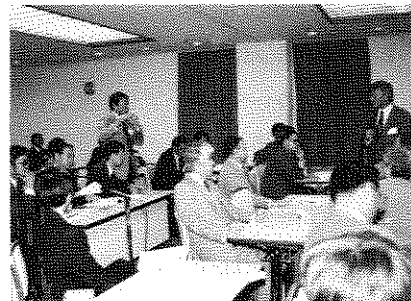
FNSの基礎的問題については、2人の共同研究者と2人の招待研究者が発表した。Vrbova教授(ロンドン大・解剖)は電気刺激によって筋の本来の性質を変化できることを示した。彼女の動物実験

の結果は非常に興味深く、FNSの科学的基礎としても重要な知見である。また、Vodovnik教授(ユーゴスラビア)は「治療的電気刺激のメカニズム」、Stein教授(カナダ)は「歩行において反射が果たす重要性」、Mc Neai博士(アメリカ)は「埋め込み電極による筋収縮力の制御性」についてそれぞれ報告した。

FNSのハードウェアに関しては、青木教授(東京医科歯科大)が「体内の電極と体外の刺激装置をハイドロオキシアパタイト製の皮膚ターミナルによって接続する方法」、Peckhan教授(アメリカ)は「完全埋め込み式の装置による上肢の動作回復」、Chizeck(アメリカ)は「FNSシステム制御の問題」、Popovic教授(ユーゴスラビア)は「反射を人工的に制御して歩行させるシステム」、半田教授(東北大)は「携帯型刺激装置と皮膚を貫いて十数本の針金電極による上肢動作の回復」、牧川(国立循環器病センター)は「携帯型で多用途の情報処理装置のFNSへの応用」を報告した。

FNSの臨床応用の結果については、Keith(アメリカ)が「整形外科手術と埋め込み装置を併用しての上肢動作の回復」、Kralj(ユーゴスラビア)は「表面電極法による下肢FNS」、Marsolais教授(アメリカ)は「数十本の針金電極による歩行」、Zilvold教授(オランダ)は「表面電極による歩行」、Andrews(スコットランド)は「FNSと外部装具を併用して歩行を回復させた経験」を報告した。

治療的に用いる電気刺激については、山本(前大阪市小児保健センター)が「肛



討論のひとつコマ

門括約筋の制御」、玉置教授(和歌山医大)は「神経圧迫による歩行障害に対する電気刺激」、Stefanovska(ユーゴスラビア)は「痙性の治療」、筆者は「針金を挿入して筋力を強化する方法」を報告した。

最後に、Mortimer教授(アメリカ)が、FNSの現状と今後の展開について総括的な講演を行った。

■昼夜にわたる白熱した討論

参加者全員は会場併設のホテルに泊り込み、会場内はもちろん、宿舎においても深夜まで、ある時は和やかに、またある時は激しい議論が交わされた。活発な討論を通じて、研究面はもちろん、人間的にも国際的交流の実を十分に挙げる事ができた。国内の若手研究者が多数参加した本ワークショップは、わが国におけるFNS研究の活性化にも大きな寄与ができたと考えられる。

Mortimer教授が総括講演で述べたように、多くの技術的な問題は解決され、FNSによって物を把握したり階段歩行ができる段階に到達した。FNSの今後の課題は臨床応用の普及であるが、そのためには技術的な改良とともに、現行の医療制度に取り組むなどの政治的・経済的問題を解決する努力が必要であろう。

多くの参加者から、今回限りでなく定期的に開催してはとの意見が出され、第2回の本ワークショップを3年後に開催するよう努力することになった。

砂漠化した草原に緑の牧農社会の再来を！

— 沙漠緑化と農業開発に関する日中国際シンポジウムを開催 —

山本太平 (鳥取大学農学部砂丘利用研究施設) 内蒙古沙漠開発研究会

■シンポジウムの開催にいたるまで

内蒙古の毛烏素沙漠 (現地の表記に従って「沙」を用いる) は、中国の沙漠地帯では最も東の端に位置し、黄河の流れに三方を囲まれたオルドス高原の南東部に広がっている。40年前の解放初期、この沙漠は105万ha程度であったが、近年になって年間約10万haの速度で拡大し、現在の総面積は約400万haにも及ぶ。かつて遊牧の民が彷徨した草原が、沙漠化していったのである。

一方、中国の他の沙漠に比べて地下水は豊富で、日射資源にも恵まれているため、中国政府は沙漠緑化と農業開発の潜在力の高い重点地域に指定し、日本政府にも技術協力を要請している。

我々が中国側研究者の熱心な求めに応じて現地を訪れたのは1984年のことであった。その後1985年の秋以来、トヨタ財団の研究助成を得て3年にわたる日中共同調査を開始することになった。日本側は各地の8大学から20名程度、中国側は内蒙古の5研究機関から約30名が参加し、毎年春から秋にかけて沙漠の中に設けられた研究センターに泊り込んで観測と実験を繰り返した。その他にも、毎冬、数名の中国研究者が日本各地の関連研究機関を訪問して見学と討論を重ね、また若い研究者の中から3名が鳥取大学の大学院に留学して緑化技術の研究に取り組んでいる。

共同研究は1988年に一応完了し、この間の成果は日中両国語で調査報告書⁽¹⁾として出版する他、数多くの論文をそれぞれの関係学会誌等において発表してき

た。研究内容は沙漠化の機構と動態についての検討を中心としたもので、特に、気象、土壌、砂防、緑化、灌漑、作物、農業機会等の立場から、沙漠化に逆行しないような緑化と農業開発の技術について提言を試みたものである。

このたびの日中共同の国際シンポジウムは、これらの成果を総合的に検討する機会として計画されたもので、トヨタ財団の成果発表助成によって開催した。

■若手の研究者が中心となった報告

シンポジウムは、京都大学会館において、1989年12月13日と14日の2日にわたり開催された。13日は、午前が「気象環境」と「灌漑・排水」の2セッション、午後が「砂防」と「緑化」の2セッション、14日は「作物・生産基盤」のセッションと特別講演であった。それぞれの5つのセッションには1名の座長と3～6名の研究報告者を配し、参加者全員が討論に参加した。報告者は日中とも若手の第一線の研究者が中心である。研究報告と特別講演を通して投稿論文は30に達したが、多くが日中研究者の共著論文であるのも、印象的であった。報告は日本語と中国語で行われ、3名の留学生が通訳として活躍した。

参加者は、報告者22名 (中国側13名、日本側9名) を含めて総勢約100名 (大学研究者、民間の研究者、学生等) となった。かつて寝食をともにして共同観測、共同実験を行った仲間の1年ぶりの再会でもある。フィールドを熟知した者同士での討論はきわめて具体的で突っ込んだも

のであった。休憩時間やレセプションでの会話も、カタコトの日本語・中国語があちこちで飛び交い、特別の親しみに満ちていた。

また、13日には来日中の中国国家自然科学基金委員会訪日代表団6名も参加し、シンポジウムとレセプションはさらに盛会となった。⁽²⁾



レセプション風景 (右から高維暉・筆者・水之江政輝の名氏)

■今後の課題

このシンポジウムも含め、これまですでに多くの研究成果を発表してきたが、しかしこれらの成果においては、個々の研究分野からの開発技術や提言が中心となっており、総合的な技術体系の構築までにはいっていない。

今後は、総合的な観点から開発技術の基準化について研究を継続すると同時に、日本側の新しい開発技術と中国側の伝統技術を融合させ、毛烏素沙漠に適用できるユニークな技術体系を確立することが重要な課題と考えられる。

さらに、これらの成果はこの沙漠で現在、計画・実施されている緑化と農業開発事業に直接還元されるだけでなく、この地域と同様の自然条件を有する中国の他の乾燥地開発のプロジェクト、ひいては世界の乾燥地域に広く適用できるものと考えられる。

[注] (1) (2)とも「トヨタ財団レポート」No.51(1990.1)を参照

東南アジア本に市民性を

—「隣プロ」の評価をめぐる—

姫本由美子 国際助成部門

●多様化する東南アジア関係の本

東京・新宿の紀伊国屋書店や渋谷の教文社などの大きな書店には、最近アジア関係の本を陳列したコーナーが設けられている。また小規模ながらアジア関係の本だけを専門に扱う、神田のアジア文庫のような書店も登場している。アジア関係の本というと、ひところは、アジア経済研究所から出版された経済、金融の本、お堅い学術書、あるいはベトナム戦争に象徴される「動乱のアジア」をテーマとしたルポルタージュなどがほとんどであった。しかし、この10年あまりの間に、その本の種類は徐々に多様化してきている。東南アジアの料理、織物、音楽をテーマとした本、あるいは日本の社会問題ともなりつつある外国人労働者やジャバゆきさんの問題を扱った本が登場して、テーマの多様化が進行する一方、その書き手も、学者や新聞社の特派員に限らず、東南アジアに旅行したり滞在したことのある学生や主婦にも広がっている。

●書店で目立つ「隣プロ」の本

さて、こうしたバラエティーに富み始めたアジアの本の陳列コーナーの一角を、東南アジアの文学作品の翻訳本が占めている。実は、これらの翻訳本のほとんどは、1978年にスタートした当財団の「隣人をよく知ろう」プログラム・翻訳出版促進助成を受けて出版されたものである。当時、東南アジアでの日本製品の氾濫が顕著となる一方で、一般の日本人が得る情報は、新聞に掲載された日本に關係のある現地で起こった事件くらいが

関の山であった。このプログラムは、こうした日本の状況に一石を投じようと、人々の生活の機微を描いた東南アジアの文学や、現地の人々自らが自国を研究した人文・社会科学書を日本の出版社が出版する際に、その翻訳費を助成しようというものであった。

12年を経過した現在、この助成を受けて日本語に翻訳されて出版された東南アジアの文学、そして人文・社会科学書はすでに90冊を超えている。冒頭で触れた書店のアジアコーナーに占めるこれらの本の存在は、結構目立つまでになっている。

●プログラムの包括的評価を実施

さて、プログラムを開始してから、これまでに幾度か小規模な評価調査を行ってきた。1984年には、助成を受けて翻訳・出版された本が日本全国の図書館にどれくらい置かれているのか調査した。また86、87年には、翻訳・出版された本の中から数点を選び、そこに見られる翻訳の質、日本語の質に関する問題点を専門家の方々に話し合ってもらい、その結果にもとづき88年度からは、翻訳費のほか編集費も助成するようになった。

これらの調査も踏まえ、去年からはより包括的に評価する作業も行っている。すなわち、このプログラムが①時代の流れに対して先見性があるか②一般の市民に受け入れられるような社会的性質のものであるか、あるいは③日本以外（特に東南アジア）の人々からも共感を得られるような国際性を備えたものであるか、といった点についてである。また、これらの点は、当然時代の推移とともに評価も変わってくるわけで、このプログラムが10年以上を経過した現在、依然として存続させるべきものなのかどうか、と

いった検討も必要となってくるのである。

具体的作業としては、昨年このプログラムに参加した出版社、翻訳者へのアンケート調査を行うと同時に、このプログラムに関連した新聞の切り抜き等の収集・分析も行った。また、東南アジアに限定せずに、本の翻訳・出版を行っている出版社や書店の方々にも個別にインタビューを行った。そしてこの3月には、昨年収集した資料を参考に、識者の方々にさまざまな観点からこのプログラムについて話し合ってもらった。

* * *

評価の結論は簡単に出そうもないが、少なくとも現時点でこのプログラムに残された大きな課題は次の点に集約されるようである。これまでに、日本で紹介されていなかった東南アジアの文学等を紹介する契機を果たしたことに對し、その「先見性」を多くの識者から高く評価されながらも、一般の市民が気軽に読む程の「市民性」は得ていない。このギャップをいかに埋めていくかである。

東南アジアへの関心が多様化しつつありながらも、まだまだ日本人の意識構造の変革に迫る必要性を暗示した大きな課題と今後も取り組んでいく必要があるようである。

助成により出版された本の数々



1989年度助成額および1990年度助成予定額

〔1頁参照〕

単位・万円

助成項目	89年度助成額	90年度助成予定額
1. 研究助成	62件 20,100	20,000
2. 市民活動助成	18 2,730	3,000
3. 研究コンクール助成		
・第4回	1 2,000	—
・第5回	— —	—
4. 国際助成	96 12,060	12,000
5. 「隣プロ」翻訳出版促進助成	16 5,659	6,500
6. 東南アジア研究	1 1,396	—
英訳刊行助成		
7. 計画助成	11 3,280	3,500
8. 成果発表助成	17 3,027	3,000
合 計	222件 50,252	48,000

る種の元気を与えよう。さらに、財団法人・社会福祉法人・任意団体と3つの“顔”をもったその活動には、今後の市民活動のあり方における重要な示唆も読み取ることができる。(G.W.)

『インドネシアのイスラム教育』
西野 節男 著
勁草書房・刊('90.2)
A5判 524頁 9,270円(税込)

全人口の9割近くがイスラム教を信仰するインドネシアでは、普通学校とイスラム学校の二系統の学校制度が並存している。さらにイスラム教育には、近代学校の形態をとらないポンドック・プサントレンと呼ばれる伝統的な教育組織があり、とりわけ農村部ではいまでも大きな影響力をもっている。

本書は、このポンドック・プサントレンに関する筆者の教育学博士論文をもとに刊行されたものであるが、その基礎となる調査は1983年度に、第I種(個人奨励)研究を受けて行われた。比較教育学でもほとんど扱われなかったイスラム教育の具体像を示す資料として寿命の永い本となるだろう。(M.K.)

『尊厳死—充実した生を生きるために』
日本尊厳死協会・編
講談社・刊('90.3)
四六判 264頁 1,700円(税込)

この表題を目にした多くは、「尊厳死? 安楽死とどう違うのか?」といった疑問をもつであろうが、その答えは同協会の経過にも見出せる。日本安楽死協会は1976年に設立され、Living Will (生者の意志) という意思表示を手立てとして活動を行ってきたが、安楽死が安楽殺に通じる社会的印象を払拭できにくいことを認識し、「積極的安楽死」と一線を画する意味もあり「日本尊厳死協会」と改めたのである。(ノ)

新刊紹介.....

『たすけあいからのネットワーク
市民による地域福祉活動からの発信』
寝屋川市民たすけあいの会・編
松籟社・刊('89.9)
A5判 238頁 1,800円(税込)

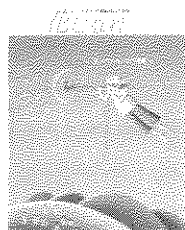
本書は「寝屋川市民たすけあいの会」(大阪府寝屋川市)の10余年にわたる活動の記録である。この会は、同市を対象とした訪問援助活動を主とする在宅サービス活動や老人および障害者との交流の場づくりをその中心的な活動としている。これは、大阪ボランティア協会・寝屋川保健所保健婦・寝屋川在住ボランティアの3者が協力して1976年に障害児を抱える家庭への訪問援助活動にふみきったことに端を発している。その後数々の試行錯誤を繰り返し78年に現在の会となった。

市民が地域で活動を実践する場合、開かれた「拠点」とさまざまな「人とのつながり」をベースとしたネットワークがいかに重要であるかを教えてくれる好書である。なお、この記録の作成と出版は当財団の市民活動助成による。(G.W.)

『花になれ 風になれ
—ネットワークの奇跡—
たんぼぼの運動を記録する会・編
(財)たんぼぼの家・刊('90.3)
四六判 314頁 1,500円(税込)

奈良・生駒山を近くに望む住宅地の一角に、他には類を見ない活動の拠点がある。16年前に始まった障害をもつ子どもたちの自立のための家づくり運動は、現在、障害者や福祉の分野にのみとどまることなく、さまざまな活動とつながりながら“いのちにやさしい(共生)社会づくり”運動へと大きく展開しつつある。

本書は、アメーバのごとく増殖をしながら一歩一歩、したたかにかつ明るく一発展してきたこの活動の軌跡を、当財団の市民活動助成を得てとりまとめたものである。淡々とした内容からも、この活動に関わった(ている)人々のほとぼるような熱気が感じられ、読む側にもあ



花になれ 風になれ

(ハ)現代医療の延命第一主義にもとづく治療や臨終場面での処置方法のあり方をめぐって種々の議論が展開されつつある。昨今、本書は人間の尊厳を全うするための“死のありかた”について考えさせる貴重な一冊である。本記録の作成と出版は当財団の市民活動助成による。(G.W.)

当財団の「成果発表助成」によって印刷された報告書を紹介します。入手ご希望の方は、送料分の切手を同封のうえ、財団レポート係宛お申込みを。なお、品切れの際はご容赦ください。

C-017 オホーツク海の流水と人間生活とのかかわりに関する研究 (オホーツク流水研究会 代表・山原良一 B5判 122頁 '89.12、送料310円)

オホーツク海沿岸地域は、毎年、冬になると流水の接岸で話題となる。紋別市を拠点とする同研究会一住民や大学関係者等を中心に構成一は、当財団の第4回研究コンクールで助成を受け、流水が人々の生活に及ぼす影響などについて1986年4月から2年半程、予備および本研究を行った。

本報告書は、その成果をとりまとめたものである。自然環境に対する流水の影響やそのような環境下での住民の生活実態に関する調査結果、およびこれらを踏まえての流水と共存するための具体的な提言などからなる。

C-019 「からむし」を通してみた植物と人間の共生 (昭和村生活文化研究会 代表・菅家博昭 B5判 259頁 '90.3、送料310円)

越後上布などの原麻(原料)である「からむし」は、イラクサ科の多年草で、古くから繊維植物として利用されてきた。中世からこれを栽培してきた福島県昭和村にある同研究会は、失われつつある「からむし」栽培の技術を記録することを主な目的に、第5回研究コンクールで助成を受け、1988年4月から1年半程、予備および奨励研究を行った。本報告書はその成果をまとめたもの。

016 途上国における生命科学技術の健全な普及と利用のための国際協力の方法に関する研究一試行的アンケート調査の結果について一(代表・中島 泉 A4判 19頁 '90.2、送料175円)

代表者ら(名大・医・免疫学教室)は、途上国でバイオ・テクノロジーが有効かつ健全に普及し利用されることを最終的な目的に、標記のテーマにて当財団の1988年度研究助成を受け、その予備研究を実施した。

本報告書(英文も同時発行)は、その一環として行われたアンケート調査の結果を整理しまとめたもの。

お知らせ

当財団では、昨年度の助成研究につき、下記のとおり経過報告会を予定しています。ご関心おありの方は研究助成部門までご連絡を。場所は、いずれも東京・六本木の国際文化会館を予定。
第I種(個人奨励)研究
5月11日(金)および同12日(土)
第II種(試行・準備)研究
7月15日(日)または同16日(月)

第27回研究報告会のご案内

アラスカ発 いのちへの問いかけ
—変わりゆくカリブーと
— エスキモーの生活—
日時 1990年5月15日(火) 13:20 17:20
場所 日本青年館・国際ホール
(東京都新宿区霞ヶ丘町)
報告 「ファインダーをとおして見た
アラスカの自然・動物そして人間」
星野道夫 写真家
トーク・イン

“優されゆく自然と
いのちをみつめて”

小原秀雄 動物学者
原ひろ子 文化人類学者
星野道夫 写真家

* * *

●参加希望の方は、(自宅)住所・氏名・年齢・所属/勤務先・電話番号を明記のうえ、お葉書にて5月10日までに財団宛お申込みください。(参加無料)

編集後記

▶ご覧の通り今回から紙面が変わりました。50号発行を機会により読みやすさを念頭に検討してきましたが、いかがでしょうか?

▶さて、今年は年明け早々から、衆議院選挙、為替や金利の変動、日米構造協議等々、内外から日本を揺るがす出来事が相次いで起こっています。

▶政治は“三流”、経済は“一流”と言われてきたわが国ですが、最近はその経済にも疑問を唱える向きが増えています。

▶「世界の孤児」とならないためにも、社会や生活の在り方を一人ひとりが見直さねばならない時期にきているようです。

Think Globally Act Locally!

トヨタ財団レポート No.52

このレポートを継続してご希望の方は、お葉書にて財団宛お申込みください。

発行日 1990年4月28日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 山口日出夫
編集者 渡辺 元
印刷 真友工芸株式会社